
学園黙示録highschoolofthedead + α

バリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録high school of the dead + α

【Nコード】

N6364V

【作者名】

バリー

【あらすじ】

学園黙示録にオリジナルキャラクターを追加した話です。

プロローグ

ある日を堺に世界は＜奴ら＞が徘徊する地獄と化した。

＜奴ら＞は人間を喰い、喰われたり、噛まれた人間は＜奴ら＞になる。

そんな地獄の中でも生き残る者達はある。刀を振る者銃を構える者。彼等は生き残ることができるのか？

学園黙示録のオリジナル小説です。

オリジナルキャラクターも出ます。

処女作ですし、誤字脱字もできるかもしれませんが、頑張りたいと思います。

主人公、間龍次が既存キャラクター達と行動を共にする話です。

キャラクター紹介

間龍次 16歳

身長180?

体重82キロ

趣味無し

特技 銃器とマチェットの取り扱い、バイクと車の運転、CQC。
両親は特殊部隊の隊長と隊員。

中学校卒業後、次期隊員候補としてアメリカに渡る。

しかしある理由で帰国。藤美学園に転入生として入った。

孝、麗、沙那とは幼なじみであり、コータとはアメリカで会っている。冴子とは同じクラスで顔を合わせる程度

護身として拳銃を持っており、アサルトライフルのパーツを学園内に隠している。

第一話

藤美学園に入って二週間が経った。

入った当初は同じクラスの人達や他のクラスの人達から質問責めに逢ったが、二週間もすれば慣れる。

外では桜が咲いていた。

ヴーヴーヴー

携帯を開くと、海外に居る親父からのメールだった。

「緊急事態だ、今すぐ、武器を装備した方がいい。」
？

何を言ってるんだ？この人は、この平和な一時に何故そんなことを言う？

いざという時の為にM9はばれないように持ってきているので、装備した。
すると、

教師「教師及び、全校生徒に連絡します！たったいま、学園内で暴力事件が発生しました！生徒は先生の指示に従って避難してください！繰り返しします！たったいま、学園内で暴力事」

教師（放送）「うわあああ！やめろ！助けてくれええ！い、痛い！痛い痛い痛い！ぎゃあああ！……」

生徒・教師「うわあああ！……」

皆凄い慌てて出て行った……

龍「あれ？俺だけ？」

教室には自分だけしかいなかった。

龍（こういう時こそ状況確認が大事だな。）

という事で電子双眼鏡で窓の外を覗いてみると、それはまさしく地獄だった・・・

龍（人が人を喰っている！それに体も所々腐ってやがる・・・）

親父が言っていたのはこういう事だったのか・・・しょうがない部品取りに行くか。

俺はナイフも取り出し、M9を構えて教室を出た。

第一話（後書き）

次の話から孝、麗が出ます

第二話

教室出て屋上を目指した。この学園は珍しく屋上の鍵は開いているが、ほとんど人は入って来なかったので隠していた。

廊下を走っていると初めて人影を見つけた。

とりあえず話し掛けて見るか。

龍「おい大丈夫か？」

・・・気まずい・・・すると

「うゝあああ」

龍「まるでゾンビだな・・・」

すぐに銃口を向けた

龍（落ち着け、こいつはもう人じゃない）

龍「許せ」

パァン！ドサァッ

銃を見るとあの事件を思い出す・・・

おっと、鑑賞に浸ってる場合じゃなかったな。屋上に行かなければ。

バァン！

なんだ、教室からぞろぞろ出てきやがった！

龍（こいつら音に反応するのか・・・）

俺は囲まれる前に走り去った。

＼屋上side＼

<奴ら>がバリケードを壊そうとしている音がする・・・

僕、小室孝は幼なじみの麗とその彼氏である永と屋上に避難してきた。

しかし、永は来る途中に噛まれ、<奴ら>になったが僕が殺した・・・
・横では麗が静かに泣いていた。

？

孝（扉を開ける音がした。誰か避難しに来たのか？俺達以外に誰か生きてたのか？）

確認しに行った。

すると懐かしい顔が目に入った

孝「龍次さん！！！」

＼龍次side＼

やっと屋上に着いた・・・

ここまで着て解ったことは三つ

一め、<奴ら>は頭を撃たないと死なない

二つめ、<奴ら>は恐ろしく力が強い。

掴まれたが、一応CCCで対処した。

三つめ<奴ら>に噛まれると<奴ら>になる。
ここに来るまでに何度も見てきた。

屋上の扉を開けた

＜奴らが＞いた。

龍（しょうがない、突破するか）

「龍次さん！！！」

あれは孝か、生きてたのか！

龍「今からそっちに行く！」

数分後

龍「久しぶりだな二人とも」

孝「二年ぶりですね」

麗「新しく来た転入生って龍次さんだったんですね」

龍「ああ。色々あって帰ってきた」

この二人と話すのも懐かしい。

孝「ところで、右手に持ってるそれは・・・」

孝はM9を凝視している。

龍「これか？これは護身用にいつも持っているんだ」

おっと本題を忘れるところだった。
確か天文台の用具入れに・・・あった！！！！俺はアサルトライフル
のパーツを取り出した。

龍（後は工具室と職員室だけだな）

確か工具室はこの直ぐ下だったはず。

龍「そういえばお前達、武器は有るのか？」

孝「俺は金属バットと麗はモップの柄です」

さすがに、それだけでは突破できるかどうか・・・

麗「あの、消火栓はどうですか？」

麗が消火栓を指差す。

悪くないな・・・

龍「よし、それで行こう」

消火栓の準備も終わった。

孝「用意はいいか？」

麗「いいわ！」

孝「まわせえっ！！」

麗は消火栓の栓を回す。

孝「おうあっ。くそっ……。」

麗「大丈夫！？」

孝「大丈夫……だ！」

孝「楽しそうにあーうー言いやがって……気楽でいいよなあお前らは！喰らえ！」

孝は消火栓でふさいでいた机とかを巻き込みながら、奴らを吹き飛ばす。

孝「くっはっはあっ！」

孝は奴らを吹き飛ばす。

・・・なんか孝楽しんでないか・・・？

数分後

孝と麗が話している。俺はそれを聞き流しながら先程使っていたホースを体に巻いていた。

孝「龍次さん何やってるんですか？」

孝がこちらに気づいたようだ。

龍「この直ぐ下に用があつてな。後で職員室で合流しよう」

そう言うと俺は屋上から下りて行った。

第二話（後書き）

次は高城沙那と平野コータが出ます

第三話

やっと工具室に着いた。窓も開いてる。

龍（不用心だな、いや此処は三階、しかも上から降って来るとも思わないか）

俺は銃を取り出し中に入った。

<奴ら>が倒れている！？

頭には釘が刺さっている。しかも廊下には人の気配がする、生存者がまだいたのか・・・

？「誰だ」

向こうから話し掛けられた。手には銃らしき物も持っている。

龍「まで、俺は此処の生徒だ」

？「その声は龍にいい？」

さつきとは別の声だが、聞き覚えの有る声だった。

龍「沙那か、良かった、生きてたか」

沙「龍にいいこそ、無事で良かった」

二人とも中に入って来た。

龍「君にも前に会ったことがある、確かアメリカだっけ？」

平「平野コートです」

そうだ思い出した。

確かやたら銃に詳しかった。

沙「何？二人とも知り合い？」

龍「まあな、それより、平「あゝッ！それはベレッタM92F！！
！ちよつと見せてください！」

龍「ああ、ほれ」

俺は平野に銃を渡し、隠し場所からパーツを取り出した。

龍「これから職員室に行つて孝達と合流するが、一緒に来るか？」

沙「ええ、一緒に行くわ、行くわよ平野」

平野に銃を帰してもらった。

龍「なあ、お前ら付き合つてるのか？」

沙「なっ何言つてるのよ、そんなはず無いじゃない／＼／」

顔が赤くなつてゐる。

平野に関しては既に放心状態だ。

龍「そうか？仲が良いように見えたが」

沙「そんなこと無いわよ！速く行きましょ」

そう言つて沙那は足速に部屋を出て行った。

龍「しょうがない、行くぞ平野」

平「イエッサー！」

俺達は工具室を後にした。

第四話

工具室を出て10分後

龍（こういうのを四面楚歌って言うんだろうな）

周りからく奴らゝがどんどん近ずいて来る。俺はM9、平野は自前の釘打ち銃で奮闘していた。

バン！バン！

龍「まだ来るのか！？」リロードしながら叫ぶ。

沙「きゃあああ」

後ろを振り向くと今にも沙那が噛み付かれそうになっていた。間に合わないか？

しかし、持ってきていた電気ドリルで自分で倒していた。

しかしこの状況はまずい、どうやって切り抜ける？

孝「龍次さん！」

龍「孝！麗！左を頼む」

更に別方向からもう二人現れた

あれは鞠川校医と同じクラスの毒島か。

冴「私は右を殺る」

バン！

龍「これで最後だな」

冴「私は三年の毒島冴子だ。君は確か同じクラスの、」

龍「間龍次だ。改めてよろしく」

その後一通り挨拶が終わり職員室に入って行った。

数分後

孝達が何やら話し合っている。どうやらこの騒ぎは世界規模らしい。

俺はというと集めたパーツでアサルトライフルACRを組み立てた。平野が食いついてきたのは言うまでもない。

龍（マガジンは四つか・・・もう少し持ってくれば良かった）少し後悔した。

どうやら遠征バスで脱出後、孝と麗の親を探すことで決まったらしい。

その後、生存者を救助し正面玄関前の階段まで来ていた。

さすがにアサルトライフルを持ってるどジロジロ見られるが、この状況下だ何故持つてるのか聞いてくるやつは居ない。

龍「結構居るな、どうする？」

沙「隠れなくても良いのに」

孝「じゃあ高城が証明してくれよ」

冴「例え高城君の説が正しいとしてもこの人数では静かに進むことなどできません。校舎の中を進み続けても……襲われた時に身動きがとれない」

麗「玄関を突き抜けるしかないのね」

毒島さんの指摘に麗が同意する。

孝「じゃあ、僕が行くよ」

龍「危険だ、俺が行こう」

孝「いや、龍次さん達はいざという時のために残っててください」

龍「……わかった、無理はするなよ」

そういうと孝は下りて行った。

少しして音が鳴り、孝が来ても良いと合図した。

しかし現実はいまいかない。

さっき救助した生徒が持っていたサスマタが階段の手摺りに当たってしまったのだ。

孝「走れ！」

沙「なんで声だしたのよ！黙っていれば手近な奴だけ倒してやりすごせたかもしれないのに！」

麗「あんなに音が鳴り響いたんだもん、むりよ」

龍「喋ってないでバスまで走れ！」

つかみ掛かって来るのは投げ飛ばし、進路の邪魔になっているものは撃ちまくった。

龍「全員乗ったな、先生速く！」

「助けてくれええ！！！」

孝「誰だあれ？」

龍「あれは三年担任の紫藤だな」

麗「紫藤・・・」

なんだ、麗の雰囲気が変わったな・・・紫藤がどうかしたのか？

その後、紫藤を乗せた俺達は辛くも学校からの脱出に成功した。

第五話

（バス車内）

紫「いやあ、助かりました。リーダーは毒島さんですか？それとも間君ですか？」

龍「そんなものは居ません。協力して脱出した、ただそれだけです」
紫「それはいけませんね……生き残る為にはリーダーが絶対に必要です。目的をはっきりさせ秩序を守らせるリーダーが……」

龍（何を言ってるんだこいつは？）

麗「助けたこと、絶対後悔するわよ」

後ろでは麗が今だに怒っている、この二人の間に何があったんだ？

紫「ところで間君、何故持ってるのか知りませんが、それは子供が持つべき物ではありません。私が預かりましょう」

・・・

俺は無言でアサルトライフルを紫藤に向けた

紫「ヒッ！何をするんですか！？」

龍「あんまり、俺を怒らせないで下さい、それとも俺よりも銃を扱えると言うのなら渡しますけど」

不良「とっとと渡せって言ってるんだよ」

不良が殴り掛かってきた。

龍（また面倒なのが出てきたな）

何発も殴って来るが全部避けた、しつこいなこいつ

不良「ナメやがって」

しょうがない。

バシッ！ズドン！

一瞬のうちに組み伏せた

孝「今のどうやったんだ・・・？」

麗「あっという間だった・・・」

不良を離して席に着いた。

不良も諦めたらしい。

平野「いまのはCQCですよね？」

平野が尋ねてきた。

龍「ああ、昔教えてもらった」

訓練時代が懐かしいな。

同じ年が青春してる中、俺は訓練ばかり。

オマケに苦い経験を味わってしまった。

そんなことを考えているとさっきの不良がまた何か言ってる。

不良「だいたいよお！何で俺らまで小室達に付き合わなけりやいけ
ないんだ？お前ら勝手に街へ戻るって決めただけじゃんか！！」

すると根暗っぽいのが便乗してきた。

いたんだ君、気付かなかった・・・

根暗「そうだよ……。このまま進んでも危ないだけだよ……。どこか
に立て籠った方が、さっきのコンビニとか！」

キキイイー！

鞠川先生が車を止めた。

鞠「もういい加減にしてよ！こんなじゃ運転なんか出来ないじゃない！！」

鞠川先生が不良に怒鳴った。

冴「なら、君はどうしたいのだ」

毒島さんが不良に聞く。

不良「き、気にいらねーんだよ！こいつらが気にいらねーんだ！！
なんなんだエラそうにしゃがって！」俺と孝を指差して怒鳴った。

言うに事欠いてそれかよ、俺はともかく孝は何もしてないだろ。

孝「なにがだよ？・・・俺がいつお前に何か言ったよ？」

孝がキレ気味に言う。

苛々した平野が釘打ち銃を向けようとするが沙那が制止する。

不良が孝に掴み掛かる。

龍（しょうがない、もう一度やるか）

俺は席を立ちはじめた。

すると助手席に座っていた麗が席を立ち、モップの柄で不良を突いた。

麗「最低・・・」

麗がもがいてる不良に吐き捨てた。

パチパチパチパチパチ

紫藤が拍手をしていた

紫「素晴らしいですね、宮本さん」

「しかし…こうして争いが起こるのは私の意見の証明にもなっていきます。だから、リーダーが必要です。我々には！」

まだ言うのか、こいつは

沙「で、立候補者は一人なわけ？」

紫「私は教師ですよ、高城さん。そして皆さんは学生です。それだけでも資格の有無ははっきりしています。」

紫藤は後ろを向くと

「私なら問題が起きないように手を打てますよ？どうですか、みなさん？」

パチパチパチ

後ろの方から賛同の拍手が上がってる。

麗「先生、私降ります、ドア開けてください！」

麗が降りて行き、孝が追い掛けて行った。毒島さんも連れ戻しに行ったようだ。

龍「ん？あれはやばい！！」

俺が見たのは暴走しているバスだった。

しかも進行方向に三人がいる！

俺はバスを駆け降りたが間に合わない！

孝と麗はバスを隔ててトンネルの向こう側にいた。

龍「大丈夫か孝、麗！」

「どうやら大丈夫のようだ。」

孝「龍次さん、5時に、東署で合流しましょう！」

龍「わかった無茶するなよ！」

俺と毒島さんはバスに戻ろうとしたが＜奴ら＞に囲まれていた。

俺はA C R、毒島さんは木刀で＜奴ら＞を殲滅し、バスに乗った。

冴「鞠川校医、此処はもう進めない。他の道を」

鞠「わかったわ、他の道を探しましょう」

俺達は孝と麗と別行動することになった。

第五話（前書き）

感想とか頂けるとすごく嬉しいです。

第五話

孝達と分かれて、数時間後、俺はACRの動作確認、残弾確認をしていた。

マガジン一分しかないし、M9は五発しかない・・・

ちなみに他の奴らはというと、紫藤は後ろで熱弁している。

俺、沙那、鞠川先生、平野、毒島さん以外の生徒たちが聴き入っている。

龍（まるで宗教だな・・・）

こっちは家族構成や、どんな仕事をしているのか話していた。

平「祖母はバイオリニストでした」

沙「完璧・・・」

平野は親父が宝石商、母がファッションデザイナー、祖父が船の船長という驚きな家族構成だった。

冴「間君の両親は何をしておられるのだ？」え？俺？

沙「そういえば私も知らないわね、昔散々聞いたのに教えてくれなかったし」

鞠「私も知りたい！」

ホントは言っちゃあいけないんだが、この状況だ、それに、さっき携帯でニュース見たら親父達の部隊出てたし。

龍「俺の両親は国連が創った多国籍特殊部隊の隊員をやってる、親父は日本人、お袋はフランス人で本部はなぜかアメリカにある」
「公式には発表されてなかったから、ホントは言っちゃいけなかったんだが、さっきニュース出てたし」

沙「平野と負けず劣らずね・・・」

毒「どうりで銃を持ってる訳だ」

平「さっきのCCCは両親から？」

龍「ああ、両親のいるアメリカでな」

鞠「みんな、どうするの？私も行きたいし」

鞠川先生が話題を変えた。

沙「えっ？良いの？」

沙那が驚く。

鞠「私ももう両親いないし親戚も遠くだし。こんなこと言っちゃいけないんだけど紫藤先生あんまり好きじゃないの」

「「ぷっ」」

全員吹いた。

紫「どうしたのですか皆さん？ここは一致協力して」
「気になったのか、紫が聞いてきたが、」

沙「ご遠慮するわ、紫藤先生！私達は私達の目的があるの、修学旅行じゃあるまいし、あんたに付き合う義理なんてないわ！」

沙那が遮るように叫んだ。

紫「あなたたちがそう決めたのならどうぞ自由に、高城さん、なにしろ日本は自由の国ですからね。しかし」紫藤は指を合わせ舌舐めずりする。

「あなたは困りますね鞠川先生！現状で医師を失うのはマイナスが大きすぎます！」

「どうです？残ってもらえませんか？こちらにもあなたを頼りにする生徒達もいるのですさあ、鞠川先」

パシュン！

ある物が紫藤の言葉を止めた。

平野が釘打ち銃を撃ったのだ。

釘は紫藤の頬をかすり、椅子に刺さった。

紫「ひ、平野君？」

平「外した訳じゃない、外したんだ」

紫「君はそんな生徒では・・・」

平「俺が何人片付けたと思ってるんです？だいたい、お前は前から俺の事馬鹿にしてやがったじゃねーか！！！」

「我慢してきた！俺はずっと我慢してきたんだ！普通に生きていきなかつたから、ずっと我慢してきたんだ！！でも、もうそんな必要ない。普通なんて何の意味もない！！だから俺は殺せる。生きてい

る奴だつて殺せる」

今だに紫藤はビビっている。

平「毒島先輩！間先輩！後衛は俺が勤めます！」

毒「おのこだな！平野君！！！」

こうして俺達はバスを降りた。

毒「どう進む？私はこの辺りはよく知らん」

沙「御別橋の方に行ってみましょう」

そして御別橋に向かってる最中に孝達と出会った。

麗「先生！」

麗が鞠川先生に抱き着いた。

鞠「あらあら、宮本さん。土偶ね！」

麗「奇遇です・・・」

その後どうやって川を渡るか話しあっていたが、

鞠「今日はもうお休みした方がいいと思うの、近くに知ってるお部

屋もあるし」

龍（お休みって・・・）

沙「なに？彼氏の家？」

鞠「ち、違うわよ！お、女の子の部屋だけど、お仕事が忙しくていつも空港とかにいるから鍵を預かって空気の入れ換えとかしてるの！」

平「マンションですか？見晴らしは良いですか？」

鞠「あ、うん。川沿いのメゾネットだから。すぐそばにコンビニもあるし。あ、あとね。車も置きばなしなの。戦車みたいなの」

沙「電気が通っているうちにシャワーも浴びたいし」

平「そ、そうですね」

平野よ、顔に出てる。

沙「何考えてるのよ！この変態！」

平「あうっ！」

・・・良い蹴りだ。

孝と先生がバイクで先に行き、俺達が後から来ることになった。

数分後

着いたのだが・・・

龍「軍用ハンヴィーかよ」

沙「どういう友達よ」

まあ取り敢えずこれで夜を無事過ごせるな

俺達の中に入ろうとしたが、

「うゝああああ」

中からく奴ら＞が出てきたな。

毒「お互いにカバーすることを忘れるな！」

全員頷き、突入した。

よく考えて見れば、世界が終わって初めて俺達は逃げずに攻めている。

俺達はこの短時間で成長したのかもしれない。

龍「こいつでラスト！」俺は最後の弾を撃った。

そして俺達は世界が終わって初めての夜を迎えた。

第五話（後書き）

次回はありすちゃんとジークが出ます

第六話

鞠川先生の友達のマンションでつかの間の休息を得た俺達。

女子達は風呂、平野と孝は二階で何かをしていた。

龍「何してるんだ、お前達？」

俺も二階に上がってる聞いてみる。

そこには壊れたロッカーが一つあり、孝達がもうひとつ壊そうとしていた。

孝「武器を探してるんですけど、龍次さん少し酒臭いですよ？」

龍「ああ、一階にウイスキーがあったから少し飲んできた」

そんな会話をしている間にロッカーが壊れて開いた。

中にはショットガン一つ、ライフル二つ、ボウガン一つが入っていた。

平「やっぱりあったああ」

平野が興奮しながら銃の解説をしている。

弾薬を確認してみたが俺が持ってる銃には対応していなかった。つまり、今持ってるのはサバイバルナイフだけという事になる。些か不安だ・・・

家に戻っても家にあった銃は両親の所に全部親に送ってしまった。

隣では孝と平野が話している。

平「アメリカのPMC（軍事民間企業）、ブラックウォーター社で銃の取り扱いを教えてもらったんだ」

「たしか、その時に間先輩に会ったんだ」

龍「ああ、そこのお偉いさんと親父が友達でな、時々行ったりしてたんだ」

こんな話しをしていると外から声が聞こえてきた。
双眼鏡で覗いてみると、プラカードのような物を持っている。
テレビを付けると調度そこが写っていた。

龍「左翼団体かなんかだな。ほっといた方がいい」

しかも警官が先頭に居たやつを撃った。

鞠「間く〜ん」

龍「どうしたんですかって、ええ!？」

鞠川先生がタオル一枚で二階に上がってきたのだ。それに酒臭い、酔ってるのかこの人？

・・・そういや俺酒片付けるの忘れていた。それ飲んだのか・・・

しかも酔ってるからなのか、平野にキスをし、平野が鼻血吹いた。

俺と孝で先生を寢床に置いたのはいいが、階段で麗も酔っ払いにな

っていた。

ちなみに俺は酒に強い。

孝「俺台所に行ってきます」

さて、俺は上に行くか。

「うわあああ」

台所から、悲鳴が上がった。

龍「どうした！＜奴ら＞・・・」

そこには驚いてる孝と、裸にエプロンという出で立ちの毒島さんだった。

龍「毒島さん、服は？」

毒「ああ、孝にも言ったが洗ってしまっただけからこれを着ている着てるっていいのか、それ？」

「それと二人とも、私は信頼出来る人物には下の名前で読んでもらうようにしている」

孝「わかりました、毒・・・冴子さん」

龍「了解した冴子」

孝「慣れるの早ッ」

その後、俺は一階で酒をチビチビ飲みながら、考えていた。

龍（銃弾は無し、さっき見つけたのは孝達が装備していた方がいい。
俺は余っているボウガンにするか・・・）

「ズガン！！」

二階で銃声がした。

その後、すぐに孝が降りてきて麗と話しをしている。

龍「どうしたんだ？」

孝「女の子を助けに行きます、一人で行くので皆は出発する準備を」

龍「わかった」

そして孝はバイクで女の子を助けに行った。

数分後、俺達は準備を終え、平野を待つことにした。

沙「何やってんのよ、あのデブオタはっ」

沙御が呼びに行こうとしたが、調度角から出てきたのだが・・・

頭にライトを巻き付け、見つけた銃をすべて持ち、軍が使うような

ベストを着ていた。

平「え、どうしたの？」

沙「あんた、随分と楽しんでるわね」

龍「そんなことより、速く行くぞ」

俺達はハンヴィーに乗り込んだ。

沙「突撃ー！！！！」

孝達の前に到着。

孝は犬と女の子を抱えて塀を歩いていた。

冴「川向こう行きの最終便だ、乗るかね？」

孝「もちろん！！！！」

孝が飛び乗り、俺達は出発した。

第七話（前書き）

冴子の過去話をここで出すことにしました。

第七話

途中、鞠川先生と運転を代わり、川を渡っていた。全員に運転出来るのかと突っ込まれたが・・・

車上では沙那が見張りをし、平野と女の子が歌を歌っている、女の子の名前は希里ありすちゃんと言うらしい。
なぜか沙那が平野に怒っていた。

助手席では鞠川先生が寝ており、後ろでは他三名が寝ていた。

川向こうに到着。

龍「着いたぞ、全員起きろ！」

そして全員車から降りた。

女子は車の後ろで着替えをしている。

こっちでは平野が孝にショットガンの説明をしている。

「くくずくれたく感情の果てに」

親父から電話だ。

いまの着メロは気にするな。

龍「もしもし」

「お、生きてたのか」

「勝手に殺すな、で何のようだ？」

「そろそろ弾薬が無い頃だろうと思ってな、この前送ってきたのが

全部じゃ無いぞ、俺の書斎に隠し通路が有るから、パスワードうてば開く。その奥に有るし、引き出しの中にも一丁有る」

「わかった、取りに行くよ」

パスワードを教えてもらった後、通話をやめた。

ハンヴィーはすでに土手に上げられた後だった。

龍「なあ、沙那の家に寄る前に俺の家に寄って良いか？」

沙「別に良いけど、どうしたの？」

龍「家にまだ武器が有るらしくてな、全部親に送ったはずなんだが」

孝「じゃあ取りに行きましょう」

ということでもう一度俺が運転し、家に着いた。

中はまだ段ボールが少し片付いていないが居間で待っててもらい、俺は書斎に行った。

引き出しに一丁有るって行ってたな・・・

引き出しを開けると中にはコルトパイソンが入っていた。

とても威力が高い銃である。

次に俺はパスワードを打ち、隠し通路を開け、中に入ると少し狭いが武器庫があった。

奥に龍次用装備一式と書いてあるアタッシュケースがまとめられて

いた。

それらをすべてあけ、装備した。

M4カービン、レールシステムにはグレネードとレーザー照準器、ホログラフィックサイトが取り付けられていた
サムライエッジと書かれている銃を取った。

これはアメリカのある街の武器屋がその街の特殊部隊に提供するために造られた銃だそうで、頼めばその銃を元に、改造、カスタムしてくれるらしい。

俺のは威力、挿弾数が上げられている。

左腰にナイフ、腰の後ろには戦闘用の特殊金属でできているマチェットを装備し、胸のホルスターにコルトパイソンを入れた。

ちなみに全部制服の上に装備している。

肘当て、膝当てを付けた後、念のためにH&K USPも装備した。

多分この装備は俺が正式に入隊した時に渡される予定だったのかもしれない。

龍（後の銃は皆を呼んでから決めるか）

俺が書斎に戻ると冴子が居た。手には写真を持っている。

俺が書斎に戻ると冴子が居た。手には写真を持っている。

龍「その写真は・・・！」

冴「居間に有った物だ。隠すように置かれてたので気になったのでな、訳ありなのか？」

写真には女の子が写っていた。

龍「前に言ったとおもうが俺の両親は特殊部隊の隊員だ。そして俺は次期隊員として渡米し、訓練を受けていた。

「アメリカで訓練後アフリカに行き、そこでも訓練した。その時知り合って仲良くなった子だ」

「そして事件が起こった。某国の要人が人質になってな、公表される前に俺らの部隊に依頼してきたんだが正規隊員達が居なかったので教官と次期隊員の俺達だけで救出する事になったんだ」

「現地に着いて、いざ突入しようとしたらその子が走り寄って来たんだ。その子はよく訓練中に遊びに来ていて、今回も何かの訓練かと思って来たんだろう」

「俺が追い返そうとしたらそこをテロリストに見られたのか、撃つて来たんだ。そして俺とその子に当たって俺は気を失った。目が覚めたのは病院で作戦は成功したがその子は亡くなったそうだ。そして俺は隊を抜け、藤美学園に編入生として入った」

「それ以来俺は銃が怖くなったからほとんどの銃を親のいるアメリカに送った。＜奴ら＞に銃を向けるのは大丈夫だが生きてる人間には銃を向けたくない、人が死ぬのが怖い、殺したのが俺だと思うともっと怖い」

冴「君が殺したわけではないだろう」

龍「俺がやったのと同じだ。もっと早く気付くべきだったんだ、こんな俺に銃を持つ資格なんてな」

ピシヤッ！

冴子の平手打ちが当たった。

冴「誇りを持て、間龍次！！！！男子おのこだろ！！！！」

冴子が覇気のある声で怒鳴った。

「私達は君に何度も助けられた。それだけで資格は充分ある」

「・・・私は昔、部活が終わり、帰り途中に襲われた。だが私は持っていた木剣で返り討ちにし、大怪我を負わせた。」

「楽しかったのだ、明確な敵を持ち、それを完膚泣きまでに叩きのめすのが！！！！それ以来私は自分の性癖に気付き、恐れた。私は剣を持つのが怖い、君と同じだ」

・・・沈黙が少しの間続いた。

冴「済まない、取り乱してしまった」

龍「いや、俺も気持ちが悪くなった。それと、今度から俺も下の名前で呼んでくれ」

冴「わかったよ龍次」

龍「皆を呼ぼう、銃を撰んでもらう」

その後、皆に銃を撰んでもらい、弾薬をハンヴィーに積み、家を出た。

第七話（後書き）

バイオハザードのキャラを出すことにしました。サムライエッジだけ出すというのも変ですし・・・

高城家脱出後ぐらいに出そうかと思います。

後書きでこんなに書いたの初めてだよ・・・
それではノシ

武器紹介

間龍次

M4 裝飾付

グレネード、レーザー照準器、ホログラフィックサイト、

サムライエッジ龍次専用

コルトパイソン

ナイフ

マチェット

H & a m p; K U S P

小室孝

イサカM37 ショットガン

A K 4 7

デザートイーグル

平野コータ

AR-10

M16 裝飾付

ダットサイト

ショットガン

ベレッタM92FS

宮本麗

スプリングフィールドM1A1 Super Match 銃剣付き

グロック17

毒島冴子

木刀のみ

高城沙那

Mini-Uzi

H&Amp;K USP

鞠川静香

武器無し

希里ありす

武器無し

ジーク

そもそも持てない

その他

ドラグノフ狙撃銃

手榴弾

閃光手榴弾

など

第八話

沙「そこを左よ、左！！！！」

沙那のナビゲートの元、鞠川先生が運転している。

沙那の家に近付く事に＜奴ら＞が増えていく。

銃の取り扱いはまだ教えていない。

この状況で教えていてもいざという時に慌て撃てないかもしれないからだ。

龍「本当に良かったのか、冴子。銃を装備しなくて」

冴「私が持っていたても邪魔にしかないしな、それにいざとなったら君が助けてくれるんだろう？」

龍「ま、それもそうだ」

麗「だめ、停めてえええ！！！！」

孝と一緒に車上に居た麗が叫んだ。

道路にワイヤーが付けられていて通れなかったのだ。

「キキイイイイ」

車体が横になり、そのまま進んだ。

沙「人肉、いや血脂で滑ってるのよ!」

平「タイヤがロックしてます!ブレーキ放して少しでもアクセルを踏んで」

先生が急ブレーキをかけ、麗が反動で落ちてしまった。

孝「麗!!!」

孝が車を降り、ショットガンを放った。

俺と冴子も降り、＜奴ら＞に攻撃を開始した。

冴「援護は任せたよ、龍次!!!」

龍「承った、任せろ!!!」

冴子は木刀で＜奴ら＞を叩き、俺はM4を撃った。

沙那が出て来て孝が落としたショットガンを撃った。

沙「誰も死なせるもんですか!!! 私の家はすぐそこなのよ!」

冴「しまった!」

冴子の唯一の武器である木刀が折れてしまったのだ。

俺は腰の後ろに付けていたマチェットを冴子に投げた。

龍「これを使い」

冴「ありがとう、貸してもらおうよ」

バババババツ！

カチッ！

M4の弾が切れてしまった。

残りは大量に有るが、車の中だ、取りに行く暇が無い！

サムライエッジを抜き、撃ちはじめた。

龍「クソツきりがない！」

？「皆、伏せなさい！！！」

全員が伏せると高圧水流が＜奴ら＞を吹き飛ばした。

「今のうちにこちらへ、車は後で回収します」

俺達はワイヤーを渡った。

鞠「危ないところを助けていただき、ありがとうございました！」

？「当然です……娘と娘の友達の為なのだから」

ヘルメットを外したその人は高城沙那の母親その人だった。

沙「ママ！」

沙那が母親に抱き着いた。

冴「これ、返すよ」

冴子がマチェットを返してきたので受け取った。

俺達は沙那の家に向かった。

高城邸

沙那の父親は右翼団体「友国一心会」の会長だ。

沙那曰く「物事の正邪を自分で決めてきた男」

俺の親父とも親交が深い。

俺は平野と一緒に沙那、麗、孝に銃の扱い方を教えた。
(麗が動けないので麗の部屋で教えた)

その後俺は部屋を出た。

部屋を出てちょうど冴子に会った。

冴子は着物を着ていた。すごく似合っている。

龍「似合ってるよ」

冴「ありがとう、そう言われると嬉しいよ」

龍「ちょっと外の空気を吸ってくる」

俺は外に出て銃の点検をし始めた。

周りの大人から見られているが無視した。
すると、黒い車がどんどん入ってきた。

そしてそこから出て来たのは沙那の親父だった。

しかも檻のなかに居た奴を日本刀でぶった切った。

龍（さて、中に戻るか）

麗の部屋の前まで来た。すると突然、平野が飛び出して行った
孝がすぐに出て来た。

龍「どうしたんだ？あいつ」

孝「あ、龍次さん。いろいろありまして」

龍「まあ良いや、俺が行ってくるよ」

俺は平野を追った。

平野は庭に居た。

しかし大人達に囲まれていた。

「いい加減わたすんだ」

平「やだっ、これは借り物なんだ！それにこの中で上手く使えるの
は俺と間先輩しかない！！！！」

「てめえ、いい加減にしねえと」

龍「いい加減にしないとなんだって？」

俺が言葉を遮った。

龍「大人がいい年して褐上げするのは関心しませんよ」

「うるせえ、お前も渡してもらおうか」

「なあ君達、独り占めは善くないな、こういうのは分けた方がいい」

「優しく言っている間に早く渡せ！！！」

龍「優しく言っている間に？それはこちらの台詞だよ」

「なんだと、貴様」

殴り掛かってきたが、以前どこかでやったように組み伏せ、今度は胸に装備したコルトパイソンを引き抜いた。

龍「動くな！動いたらこいつでぶち抜く」

？「なにを騒いでいる！！！」

叫んだのは沙那の父親、高城壮一郎だった。脇には沙那の母親もいた。

「か、会長！こ、この餓鬼どもが銃を玩具と間違えてやがるんで」

壮「そこの伏せっている少年、名を聞こう、私は高城壮一郎！憂国

一心会会長だ！」

平「ひ、平野コータ！藤見学園2年B組出席番号32番です！」

壮「声に覇気があるな平野君！ここに辿り着くまでにさぞ苦労した事だろう！」

「あなた、この子は」

壮「所属しているクラスで知れた」

「どうあっても渡さぬつもりか、平野君、そして龍次」

龍「お久しぶりです、壮一郎さん。俺と平野は銃を渡すつもりは有りません」

俺は拘束を解きながら言い放った。

平「嫌です！銃が無くなったら・・・俺は、俺はまた元通りになる！元通りにされてしまう！自分に出来る事がようやく見つかったと思っただのに！！」

壮「君に出来ることとはなんだ？」

孝「あなたのお嬢さんを守ることです」

ナイスタイミング！

壮「ふむ、君は昔龍次と一緒に沙那と遊んでくれた子だな」

冴「私も平野君の勇姿を目にしております高城会長」

希「コータちゃん！」

沙「こいつがいなければ私は今頃、連中の仲間よ！こいつが私を守ってくれたの！パパじゃなくてね！！」

どうやら皆来たようだ。麗は先生に支えられている。

結局、銃は奪わないということで決着が着いた。

その夜、俺は壮一郎さんに呼ばれた。

途中で冴子に会った。

冴「君も呼ばれたのか？」

龍「ああ、その刀は？」

冴「これか？これはさっき高城会長から頂いた物だ」

俺は冴子と別れ、部屋に来た。

龍「入ります」

俺は部屋に入り、前に座った。

壮「うむ、君を呼んだのは他でも無い。これを渡そうと思ってな」
渡されたのは一振のマチェットいや、山刀だった

龍「これは？」

ちなみに俺はこういう事に関しては全くもって無知だ。

壮「この山刀を造った者はわからない。しかし、先程毒島殿に渡したものの同様、豚の頭骨を断ち切れるほどの威力を持つ」

山刀やマチェットというのは元々は戦闘用ではない。しかし、俺のマチェットは軍が造ったもので戦闘にも使える。恐らく、この山刀も戦闘にも使えるように造ったものだろう。

龍「これを俺にくれると？」

壮「そのつもりだ」

龍「遠慮はしません、有り難く受け取ります」

壮「ハッハッハッ！流石はあの男の息子だ。彼は元気かね？」

龍「さあ、電話越しでは元気でしたけど」

壮「そうかそうか、酒は飲めるな？」

龍「まあ、一応」

壮「では飲もう」

日本酒を持って来させ、飲み明かした。
次の日、俺が起きたのは昼過ぎだった。

俺が寝ている間にいろいろあったらしい。

まず一つ、紫藤が此処に来ていた。
が、結局追い出されたらしい。

二つ目、E M P 攻撃が起きたことだ。

これは凄く痛い。

簡単に言えば機械が全て使えないということだ。銃に付いているサイトは対策がされているので大丈夫だが、肝心のハンヴィーが逝かれてしまったらしい。

合流した時には既に皆装備し終えていた。

沙那に関しては母親から銃を貰っていた。

龍「で、どうやって移動するんだ？」

壮「そのことに関してだが龍次、私は昔君の父親から有るものを預かっていた。それを君に返そう。車庫に行くといい」

既にく奴ら＞が入ってきていた。俺達以外は隣家に避難することになったらしい。

俺達はく奴ら＞を蹴散らし、車庫に向かった。

そこに在ったのは・・・

軍用車ストライカーだった。上にしっかり砲座も付いてる。（作者は上に付いてる銃の名前を知りません。ごめんなさい）

皆ストライカーに乗った。

俺は上に登り砲座に付いた。

この車はE M P 対策をしていたらしい。

そして俺達は高城邸を脱出した。

鞠「どこに向かえばいいの？」

沙「近くにデパートがあるわ、そこに避難しましょう」

俺達は床主デパートと言うところに向かった。

第八話（後書き）

次の話でクリス、ジル、バリー、ジョッシュ、シェバを出したいと思えます。

流石に出しすぎかな？

ちなみに、この話はウェスカーが死んだ後の話となっています。

第九話

床主デパートに着いた俺達はく奴ら＞が来る前に荷物を運び込み、中に入った。

此処に来る前に車内にあった爆弾を使ったり、そのあとに防犯ブザーを大量に鳴らしてきたので多分そっちに行ったはず。
俺達が入ると婦警がいた。

彼女は中岡あさみ巡査だそうだ。

中「あさ、本官は先輩が本署から応援を呼んで来る間に此処を任されたので有ります」

いつその事名前と言えば良いような気が・・・

数時間後、俺達は食料品売場で先に居た避難民にばれないように食料を集めた。

沙那の「早めに此処を出た方がいい」と言うことになったのだ。

希「そういえば静香先生どこ？」

龍「そういえば居ないなあの人」

「キヤアアアア」

麗「先生の悲鳴よ！」

龍「行くぞ！」

鞠川先生は寝具売場に居た。しかも男に襲われていた。
あさみ巡査も来ていた。
銃を向けている。

中「やめるので有ります！島田さん！」

島「なんだよ、本官のねーちゃんかよ、あんたは俺の好みじゃねーんだよ」

中「これは警告です」

再び巡査が銃を向けた。だが腕が震えているのが丸解りだ。

島「なんだ？手が震えてるぞ？早く撃ってみろよ、撃てねえのか？」

龍（言わせておけば）

俺は銃を抜いた。

島「なんだ？そこの餓鬼も撃つってか？」

俺は撃てる、もう覚悟はした。

撃とうとしたその時、いつの間にか平野が後ろに周り、ワイヤーの様なもので首を絞めていた。

平「巡査に撃たれるか、僕に絞め殺されるか、どっちがいいですか」

島田は武器を捨て、鞠川先生から離れた。

中「あ、あの・・・」

龍「アンタはもう撃たなくて良いんだよ」

俺は銃をしまいながら言った。

中「あの、皆さん、ありがとうございました」

「と、特に平野さん・・・」

特に？・・・ああ、好きに成ったって事か。

麗「こんな所早く出た方がいいと思う」

あさみ巡査が避難民達に呼ばれた後、俺達は今後の事について話し合っていた。

孝「だな、早いうちにここを出た方がいい。それに、さっきの人も多分諦めてないと思う」

「な、なあ。アンタ達の中に医者居ないか！？」

突然、一人の男が走り寄ってきた。

龍「どうしたんですか？」

「取り合えず来てくれ」

男に連れられて寝具コーナーに来たが、そこには苦しそうにしているお婆さんが居た。

男「この婆さん、なんか病氣らしくて、近くに通院している病院が有るらしいんだ。いつもそこで輸血しているらしいんだが、誰か取りに行ってくれねえか？勿論俺も行く」

龍「なら、俺が行こう」

麗「でも、外に出たら＜奴ら＞に」

龍「何もしないで婆さんが死ぬのはやだからな」

麗「・・・孝、私達も行きましょう」

孝「そうだな」

龍「じゃあ行くのは俺達で、後は此処に残ってくれ、平野と沙那は屋上で援護射撃を」

「了解」「わかったわ」

龍「それと、皆にこれを渡しておく」

渡したのは耳につける通信機でストライカーの中にあった。

龍「冴子はいざという時の為に此処に残ってくれ」

冴「わかった」

龍「アンタにはこれを」

俺は男にH & a m p ; K U S Pを渡した。

「ありがとな、あと俺の名前は田丸ヒロシだ」

龍「じゃあ、行こうか」

中「あの、本官は・・・？」

龍「あなたも残って下さい」

中「わかりました」

俺達は歩いて病院まで行った。

道中の＜奴ら＞は平野達がある程度片づけてくれた。

（病院）

へりの音がする、しかも大型のへりだ。

この状況下でまだ動くへりがあったらしい。

麗「龍次さん、此処らしいんですけど」

病院の一室に着いた。

扉を開くと中に数人居た。

龍「俺が行く」

俺は左肩に付けた山刀を抜き、切り裂いた。

そして探してた者も発見。

龍「よし、戻るぞ」

龍「あれ？田丸さんは？」

俺が二人に聞いて数秒後、銃声が聞こえた。

龍「行くぞ！」

輸血道具を持ち、廊下まで走った。

そこにはく奴ら>に囲まれていた田丸ヒロシの姿があった。

龍「田丸さん！」

M4を撃ち、田丸さんに近付くと、彼は既に噛まれており、瀕死寸前だった。

田「銃で・・・死ねれ・・・ば満・・・足だ。撃ってくれ」

龍「わかった」

俺はU S Pで撃ち、彼の手元に置いた。

龍「急ぐぞ、音を出してしまった」

俺達は病院を出た。

既に周りにはく奴らゝがいた。

龍「突破するぞ」

俺と孝は銃を、麗は銃剣を駆使して突破した。

龍「平野、沙那！援護射撃はどうしたんだ！」

俺は通信機に怒鳴り付けた。

しかし返ってきた返事は

平「間先輩！何か違うく奴らゝが窓から入ってきて、僕達以外の避難民は全滅しました。今屋上に「平野！来たわよ！」
ブツッ」

通信が切れた

龍「どういうことだ？急ぐぞ二人とも！！！」

俺達はなんとかデパートに帰って来たが、中は血だらけだった・・・

龍「取り合えず屋上に行こう」

しばらく歩いていると、何かが見えた。

龍「孝、麗、構えろ」

孝「なんだよあれ」

麗「気持ち悪い」

そこにいたのは人型ではなく・・・

四足で爪が長く、皮膚が無いので筋肉が出ており、脳が膨れ上がっている化け物がいた。

しかもこっちに気付いたのか、走り寄って来た。

龍「走れるのかこいつ!？」

しかも天井にも昇っている。

孝「これでも喰らえ」

孝は近づいてきたソイツにショットガンを撃ち込み、ソイツは動かなくなった。

龍「こいつは・・・」

死体を調べてみると衣服が着いていたことから、少なくとも人からこうなったことがわかった。

先を急いでいると、さっきの奴がいた。
しかも三体。

龍「邪魔だ!!!」

俺がM4に付いているグレネードで吹き飛ばした。

数分後、屋上に付き、冴子達と合流した。

いたのは、冴子、沙那、平野、鞠川先生、ジーク、ありすちゃん、お婆さん、そして怪我をしている中岡巡査だった。

中岡巡査の怪我はさっきの奴らから受けたものらしい。

平「あいつらは舌を伸ばして突き刺して来ます、あさみさんはそれに・・・」

本当に化け物だなあいつら

鞠川先生が処置をしているが難しい顔をしている。
どうやら無理らしい・・・

中「平野・・・さん」

平「あさみさん、喋らないで。傷に悪いよ」

中「良いん・・・です、あさみが・・・もう無理なのは・・・あさみがよく知ってます・・・から・・・平野さん頼みが・・・あります、私を・・・撃って・・・」

「僕にはそんなことっ!」

「多分・・・私は・・・あいつらと同じに・・・なります・・・だつたらゲフツ、ハア、ハア、人間であるうちに・・・貴方に」

平「・・・わかりました」

平野は拳銃を抜き、そして撃った。

辺り一面に響く。

俺は中岡巡査に敬礼した。平野は横で泣いている。

バンッ！

扉からく奴ら＞が入って来た、恐らくは元避難民だろう。だが今は人を貪り喰うゾンビでしかない。

俺達は武器を構えた。

しかし、予想外な事が起きた。

なんと銃弾が降り注ぎ、く奴ら＞を蹴散らした。

上空にはさっきのヘリコプターがいた。

ヘリに機銃が付いている。どうやらそれで撃ったらしい。

ヘリが降りてきて中から筋肉質な男性二人と女性が一人降りてきた。どうみても外国人だ。

一応銃を構えた。

？「安心して、私達は味方よ」

日本語喋れるの！？

龍「証拠は？見た所どこかの部隊のようだが」

？「俺達はB・S・A・Aと言う部隊で避難している人達を助けに

きた。話がしたい、銃を下ろしてくれ」

平「確か製薬会社達が出資している部隊だよ、でもその会社の一つがこの間倒産した。確かトライセルって会社だった」

平野が部隊について皆に説明した。

俺は銃を下ろした。

「まずは自己紹介だな、俺はクリス・レッドフィールドだ」

「私はジル・バレンタインよ」

「バリー・バートンだ」

「小室孝です」

「宮本麗です」

「毒島冴子だ」

「平野コータ！藤見学園2年B組出席番号32番です！」

「高城沙那よ」

「鞠川静香です。この子達の学校の校医です」

「あたしは希里ありますだよ！こっちはジーク」

「ワンッ！」

「間龍次だ」

クリス「それにしても良く生き残ったな」

ジル「何故銃を持っているの？」

孝「それは鞠川先生の友達と龍次さんからもらいました」

クリス「そのバッチは」

クリスが質問してきた。

俺は学生服に部隊のバッチを付けていた。

龍「このバッチが何か？」

バリー「そのバッチはこの間公表された国連の部隊のものだ、そしてその部隊はB・S・A・Aに組み込まれる事に成った。なぜ君がそのバッチを？」

俺は自分の親、そして訓練時代の事を皆に話した。

孝「冴子さんは知っていたんですね」

冴「ああ、この前聞いた」

ジル「取り合えず私達の基地に皆避難すると言うことで良いかしら？」

孝「待ってください、僕達は僕と麗の親を探しているんです。それに車も」

クリス「そのことだったら大丈夫だ、この街一帯の避難民は救出した。多分君達の親も居る。車は他のものに運ばせよう。後、敬語じゃ無くても良いぞ、孝」

孝「じゃあ、行きます。それで良いよな皆？」

龍「異議無し」

ということで、皆へりに乗った。
お婆さんはへりの中で治療した。

俺達はB・S・A日本床主支部に向かった。

第九話（後書き）

ジョッシュとシェバは次に出すことにしました。

次からはオリジナル展開になります

そしてこの場を借りて、今まで読んでくれた人、どうもありがとうございます
ございます!!!!

これからも頑張りますので、呼んでくれるとありがたいです!!!!

第十話

BSAA基地内

孝と麗は親に会いに行き、冴子と沙那はジルと雑談、平野とバリーは装備について熱く語っている。

クリスは見当たらぬ。

俺は銃の手入れだ。

M4の手入れが終わり、サムライエッジの手入れに取り掛かった。

クリス「そいつはサムライエッジか？」

いつの間にかクリスが横に座っていた。

龍「ええ、知ってるんですか？」

この銃は珍しいらしく、平野も噂を聞いただけらしい。

クリス「別に、敬語じゃなくても良いぞ龍次」

「その銃はラクーンシティの武器屋がSTARSと言う部隊の為に造っていたものだ」

龍「詳しいんだな」

クリス「詳しいも何もその部隊の一人だったからな、ジルやバリーもそうだ」

「ラクーンシティって確か原発が事故を起こして消えた街」

「いや、それは真っ赤な嘘だ。本当はミサイルで吹き飛んだんだ。ジルはそこから脱出した」

「なんでミサイルを？」

「今回の様な事が起きた。あの街で」

「あのゾンビ達が？」

「そうだ、俺達は幾度と無く、ああいう奴らを倒してきた」

クリスが昔の事を話しはじめた。

洋館での事件、そして洋館からの脱出、Tウイルスと言うウイルス、ウェスカーという男、そしてこの間ウェスカーと決着をつけた事。

龍「もしかして今回の事件はTウイルスに因るものなのか？」

クリス「それは今ここの研究員が調べている、そろそろ結果が出るはずだ」

ジル「クリス、呼ばれてるわよ」

後ろにジルが立っていた。

ジル「結果が出たみたい」

クリス「よし、行くか」

龍「俺も行って良いかな」

クリス「構わないぞ」

ということで俺、クリス、ジル、バリー、冴子、沙那、平野は研究室に向かった。途中、孝、麗、鞠川先生に合流した。

研究員「随分と多いですね」

バリー「まあ良いじゃないか」

研究員「それでは説明します。まずウイルスですが、このウイルスはTウイルスではありません」
ちなみに、孝達には廊下でTウイルスについて説明した。

ジル「じゃあ何なの？」

研究員「正確には似て非なる物、ようは模造品です。恐らく他の国もこれです」

バリー「違うところは？」

研究員「オリジナルよりも構造が簡単になっています」

クリス「という事は、ワクチンが早く造れるな」

研究「ワクチンどころか、この状況を一瞬で打破できます」
沙「どうやって？」

研究員「デイルイトと言うTウイルスを完全に死滅させる薬が有るのですが、これと同じ様な物が造れます」

「しかもデイトライトは造ろうにも簡単には造れません。しかし、このウィルスに関しては簡単に造れます。この施設に有るものでも」

クリス「他のところでも可能か？」

研究員「勿論、B S A A 基地には同じ材料が有るので」

クリス「じゃあ今すぐ他の基地に連絡しよう」

沙「そういえば、ここは電磁パルスの影響は無いの？」

バリー「ああ、B S A A の基地はちゃんと対策してある」

ジル「造った後はどうするの？」

研究員「散布すれば三秒ぐらいで体中のウィルスが死滅、奴らは溶けて無くなります、まだ自我が完全に残っている程度だったら治ります。そしてこの薬は服用したら同じウィルスには二度と感染しません」

クリス「よし、後は・・・」

ジル「黒幕を探すだけね」

麗「黒幕？」

クリス「ああ、言ってなかったな。俺達が日本にきたのは今回の黒幕が日本に居ることがわかってな、ある組織の行動でこの床主の何処かに居るという事だけがわかったんだがどういう組織か、わからない」

バリー「テロリストかもしれんな」

龍「テロリスト・・・」

隊員「クリスさん、アフリカ支部のジョッシュさんが呼んでます」

クリス「彼が来たのか？ということはシェバも？」

隊員「ええ」

クリス「わかった、すぐに行く」

クリスが部屋から出て行った。

龍「そういえば、三人共日本語ペラペラだよな」

ジル「ええ、私達はよく色んなところ回るから、言語の勉強はよくするわ」

孝「そうなんだ」

その後、俺達は研究室を出た。

そして調度クリスに会った。脇には見知らぬ人が二人いた。

クリス「紹介しよう、こっちの男はジョッシュ。で、こっちはシェバだ」

ジョッシュ「よろしくな」

シェバ「クリスから聞いたわ。よく生き残ったわね」

麗「この人達も喋れるのね」

クリス「ニュースが二つある。一つはこの街一帯の避難民は全て収容した」

沙「パパとママを探して来る!!!」

平「僕も行きます」

麗「ということは紫藤も!? 私確認して来る」

孝「俺もいく!」

隊員「鞠川さん、医者が足りないので手伝ってもらえませんか?」

鞠「わかりました、すぐ行きます」

残ったのは俺と冴子だけだった。

龍「で、二つ目のニュースは?」

クリス「黒幕が判った。アメリカのテロリストグループらしい」

ジョッシュ「彼等は数年前、某国の要人をアフリカで拉致したが、公表される前に捕まった。しかし、脱獄したらしい。そして捕まえたのは、龍次。君の部隊だそうだな」

龍「俺は気絶してたけどな」

ジョッシュ「グループのリーダーの名前はヴィクトル・Rマカロフ、ロシア人だ」

バリー「多国籍のグループか」

ジョッシュ「そして潜伏先も判った。そこの二人、驚くなよ。潜伏場所は君らの母校、藤美学園だ」

第十一話

龍「嘘だろ!？」

ジヨ「正確には、その地下に研究所があり、見返りとして金を貰っていたと言うことだ」

ク「教師の内の何人かは恐らくこのことを知っているな、生き残りがいれば裏が取れるのだが・・・」

龍「いるぞ、一人」

ジヨ「本当か!？」

龍「麗、孝、今何処だ？」

麗「先生とお話し中です」

龍「連れて来てくれ」

数分後、孝と麗が連れて来た。

龍「久しぶりですね、先生」

紫「間君も生きていましたか」

ジヨ「貴様に聞きたい事がある」

バ「ちょっと来てもらおうか」

ジョッシュとバリーが紫藤を連れていった。

龍「全部吐いちまうに一万円賭けても良いな」

ク「もしかしたら最恐タッグかもしれない」

シ「ジョッシュも怒ると怖いから」

ジ「もしかして生きて帰ってこないかも」

数時間後

俺達は会議室で待っていた。途中、平野と沙那も戻って来た。

沙「乗り込むの？その研究所に」

ク「ああ、そうなるな」

バ「待たせたな」

ク「どうだった？」

ジョ「知ってる事全部吐いてもらったよ」

（（やっぱり））

バ「どうしたお前ら、苦笑いなんかして」

ク「何でもない」

ジヨ「奴らはまだ地下にいるらしい」

ク「やはり乗り込むのか」

バ「研究所では本物のTウィルスを造ろうとしているそうだ」

孝「何でそこまで知っているんだ？あいつ」

バ「あいつが一番親密にしていたらしい」

龍「なるほど」

バ「奴は何度か研究所に出入りしたことが有るらしい」

沙「どんだけ親密なのよ」

ジヨ「奴の供述から恐らくB・O・Wもいるな」

麗「B・O・Wって何？

ジ「生物兵器の事よ。昔Tウィルスを造った製薬会社アンブレラが造ったの、今は倒産したけど」

ク「厄介だな」

ジヨ「よし、作戦会議だ！！！」

バ「その前に、子供達は帰る時間だ」

龍「いや、俺も行く」

ク「ダメだ、ここからは大人がやることだ。それに相手はテロリストだ」

シェ「子供が関わることじゃないわ」

バ「我が儘を言うんじゃない」

龍「頼む！敵を俺の手で討ちたいんだ・・・頼む・・・」

孝「俺達も行かせてください！」

ク「・・・自分の身は自分で守れよ」

バ「おいクリス！」

ク「少なくともルーキーよりは使える。そう思っただけだ。それに校舎も案内してもらえるからな」

バ「どうなっても知らんぞ俺は」

「ジョッシュ皆を呼んでくれ」

ジョ「判った」

ジョッシュが隊員達を呼び、作戦会議が始まった。

ジョ「この作戦の目的はテロリストグループのリーダー、ヴィクトル・R・マカロフの確保、及び地下研究所の征圧だ。地下研究所はTウィルスの研究をしていたところだ、それにB・O・Wもいる。気を抜くなよ」

「偵察からの報告では校舎内に敵兵の姿は見られなかったそうだ」

「研究所への入り方だが、まず屋上の天文台とやりに隠しエレベーターがあるらしい、そこで一つ目。二つ目は理事長室、三つ目は寮にあるそうだ」

「マカロフが逃げない為にも、三つの場所から同時に潜入したい」

「そこで、まずは部隊を二つに分ける。一つは四部隊、二つ目は潜入部隊だ」

「そして潜入部隊からまた三つに分ける」

バ「間、高城、平野、毒島、宮本、小室は潜入で確定だな、案内してもらわなきゃならん」

ジョ「四部隊の目的は音を出して校内からある程度アンデットをおびき出す。指揮は俺がとろう」

ク「龍次、俺、毒島が天文台から行こう」

バ「俺、平野、高城は理事長室からだ」

ジ「私、小室、麗、シェバは宿舍から行くわ」

ジョ「決まりだな、ここまでで質問のあるやつは・・・いないな。作戦は三日後早朝に行く。準備とかもあるし、奴らは俺達の事に気付いていないからな。では解散っ！！！」

ク「お前達本当に良いんだな？」

他の隊員がぞろぞろと出ていく中、俺達はクリス達に引き止められた。

孝「覚悟は出来てます」

ク「なら良い。お前達には行く前に訓練して貰うぞ」

バ「後、装備も変えたかったら変えていい。武器庫にある」

ジ「B・O・Wについても学んで貰うわ」

〽二日目の夜〽

俺は月を見ていた。

孝や沙那達は親に会いに行ったらしい。恐らく最後になるかも知れないからだ。

冴「隣、良いかね」

横に冴子がいた。

龍「構わないよ」

しばらく無言が続いた。

最初に切り出したのは俺だった。

龍「作戦、明日だな」

冴「ああ」

「怖くないのか？」

「怖いよ。でもいざとなったら君が背中を守ってくれるんだろう？」

「ああ、そうだな・・・」

「あの時、君のお陰で立ち直れた」

俺は書斎での事を思い出した。

「叩いたりして済まなかったな」

「いや、それは良いんだ。それに君の本音が聞けて嬉しかった」

「私も嬉しかったよ、私を認めてくれる人を見つける事ができて」

「あのさ冴子大事な話がある・・・俺は、俺は・・・（こういう時に言葉が詰まるっていうのはホントなんだな）俺は冴子の事が」
孝「いたいた、二人共呼ばれてますよ」

龍（ここで！？タイミング悪いな・・・）

研究室

研究員「皆さん揃いましたね」

ク「薬が出来たのか？」

研「ええ、他の所もできたと報告がありました。後は撒くだけです」

バ「後は俺達の作戦が成功すれば終わりだな」

研「研究所からTウィルスを絶対に出さないでください、この薬はTウィルスには効果はありませんので」

ク「では解散しよう」

冴「龍次、さっきは何を言おうとしたのだ？」

龍「いや、何でもない。忘れてくれ」

俺は足早に部屋に戻り、寝た。

第十二話

ク「皆準備は良いな？ ジョッシユが既に校内のアンデット共と戦ってる。俺達はへりに乗って移動するぞ」

孝「準備できてます」

バ「全員へりに乗れ、行くぞ」

希、鞠「がんばってね！」

孝「行くぞ！」

午前6時35分、最後の戦いに向かった。

く藤美学園上空く

眼下に藤美学園が見える。

孝「まさか俺達が見下ろす側になるなんてあの頃じゃ想像付かないだろうな！」

たった数日間前のに懐かしい。

ク「龍次、冴子、俺達はここで降りるぞ、準備は良いな？」

龍「ああ、大丈夫だ」

冴「いつでも行ける」

ク「降りるぞ！」

別のヘリからバリィ、平野、沙那が降りてきた。孝達はもっと奥の寮から入る。

龍「クリス、そんな軽装備で大丈夫か？」

ク「大丈夫だ、問題無い」

まさかネタが通じるとは・・・

ク「俺はなるべく軽い方が良いからな」

クリスの装備はサムライエッジ、コルトパイソン、ナイフだけだった。

冴「急ごう、平野君達はもう中に入ったようだ」

紫藤の言った通り、天文台に隠しエレベーターがあった。コードを入力したら出る仕組みだ。

ク「龍次、なるべくハンドガンで戦え。アサルトは危なくなったら使うんだ」

龍「了解、行くぞ！」

エレベーターの中に入り、下に向かった。

（平野、沙那、バリィside）

理事長室に入るまでに＜奴ら＞の姿は見えなかった。

平「そういえば、なんで高城さんも来たんですか？」

沙「私は来ちゃダメな訳？」

平「そ、そういう意味じゃなくて、これから先戦闘になるのは必然なのに・・・」

沙「いざとなったらアンタが守れば良いじゃない」

バ「無駄話はそこら辺で止めとけ、降りるぞ」

下に続いている階段が見える。

沙「行くわよ平野！」

平「イエッサー！」

平（高城さんは僕が守る！！！！）

（孝、麗、ジル、シェバ side）

遠くで銃声が聞こえる。

シ「ジョッシュなら大丈夫よ」

孝「心配はしてません。麗、まだ間に合う。此処で待ってても良いんだぞ？」

目の前には下に繋がる階段が広がってる。

麗「孝と一緒になら怖くないわ」

ジ「熱いわね、二人とも」

麗「ジルさんだってクリスさんの事好きじゃないですか」

四人の笑い声が響いた。まるで恐怖を払いのけるかのように。

孝「さあ、降りよう」

第十三話

エレベーターが止まった。

ク「銃撃戦は覚悟したほうがいいな」

俺とクリスが拳銃を抜いた。

ク「開くぞ」

出た瞬間、銃を構えたが人影は無かった。

冴「いないな、全員逃げたのか？」

ク「そんな筈はない」

龍「じゃあ何処に？」

ク「わからない」

バ「こちらバリー、聞こえるか？」

ジ「私達も着いたわ」

ク「取り敢えず現在地を確認しよう、場所はどこだ？」

それぞれ近くに地図があるので確認した。

バ「B 1の食堂に居る」

ク「B 2の中央ホールだ」

ジ「B 1の休憩室」

ク「ではこのまま探索を続けよう」

バ「今の所敵は見当たらないが慎重にな」

ク「わかってる、後で会おう」

全員通信をきり、地図をもう一度確認する。

B 1は中に住むための人達の部屋等がある。

B 3からB 4で研究をしているらしい。

B 5はどういう部屋か書いていない。

今居るB 2は制御室や、配電室、武器庫等があるらしい。

「ウゴアアア」

振り向くと、資料集に書いてあったハンターというB・O・Wがこちらに向かって走ってきていた。

鱗が生えていて爪が長く、まるで怪獣だ。

三体走り寄って来る。

俺とクリスが二体倒し、残りの一体は冴子が真っ二つにした。

ク「凄いな、日本刀というのは」

龍「どうする？ クリス」

「まずは制御室に行こう、そのモニターで内部を確認する」

通路にいるハンターを難無く倒し、制御室に入った。

冴「ハンターは居るが研究員や戦闘員が見当たらないな」

ク「何か理由があるはずだ」

モニターを見ているとB3に人影があった。

バリー達だ。

部屋の扉が開かないのか、立ち往生しているらしい。

クリスが機械をいじってロックを開けた。

ク「バリー、ロックを解除した」

バリー達が入った。

後ろから音がした。

龍「誰だ！」

振り向くと孝が居た。

ク「B1は済んだのか？」

ジ「ええ、バリー達と手分けして探したわ。これを見付けたんだけど」

ジルの手の平には、鍵とカードがあった。

鍵を制御盤の鍵穴に差し込むとB4に行くためのエレベーターのロックとB3の扉のロックが解除された。

孝「誰かが此処に残ったほうが良いんじゃないかな？」

シ「私が残るわ」

ク「わかった」

シエバ以外が外に出た。

ク「一度バリー達と合流しようと思うんだが」

孝「そうしましょう」

六人でエレベーターに乗り、B3に向かった。
B3の一室に入るとバリー達が居た。

龍「三人共怪我はないか？」

平「大丈夫です」

ク「この部屋は・・・」

どうやらTウィルスを精製していたらしい。

バ「外に漏れる前に破棄しちまおう」

カプセルの中に滅菌剤とやらを入れ、Tウィルスを滅菌した。

バ「三階は一通り回った、四階に行こう」

全員エレベーターに向かった。

しかしエレベーターが動いている。

どうやら四階から上がって来るようだ。

龍「構えろ！」

全員が武器を構えた。

俺も肩からM4を取り、構える。

小室はイサカの変わりに持ってきたショットガンのSPASを、バリーはマグナム、沙那はサブマシンガンのMP5、ジルはグレネードガンを構えている。

エレベーターが止まった。

中からはアンブレラの造った究極の出来損ない、タイラントが三体出て来た。

第十四話（前書き）

後数話で完結しようかと思えます。
読んでくれる人ありがとう！

第十四話

バ「何で律儀にエレベーターに乗ってきたんだ!？」

ク「そんなの知るか!」

グレネードやマグナムだと怯むがただの拳銃やサブマシンガンじゃびくともしない。

平「首の後ろの付け根に機械みたいなのが引っ付いてます多分それで制御してるんじゃない」

ク「とにかく、奴らはロケットランチャーぐらいでしか死なん、一旦逃げるぞ」

シ「今からそっちに向かうわ、援軍付きで」

どうやら増援が来たらしい。

エレベーターはタイラントが昇ってきたエレベーターと通路で繋がっている。

向こうのエレベーターが開いた。

中からRPGー7が数本、コチラを覗いている。

孝「伏せろ!」

伏せると同時に放たれ、タイラントに直撃、タイラントが消し炭になって消えた。

平「さすがRPG・・・」

エレベーターの中からシェバ、そして自分と同じバッチを付けていて、見覚えのある顔が数名居た。

龍「親父！」

親父と親父の部隊の主力メンバーが居た。

孝達は何度か俺の両親の顔を見ているので知っている。

「俺はそこの馬鹿息子の親の間正だ、はぐまただしよろしく」

俺はというと四階前のエレベーター前まで既に歩いている。

冴「お父さんと話をしなくて良いのか？」

龍「特に話すことは無いからな」

冴子と話している間に皆追いついていた。

龍「何で来たんだ？」

正「本部からの命令だ」

霊「なんか二人共何処か似てるわね・・・」
孝「何処が？」

麗「雰囲気とか？」

親父達は親父達の部隊、俺達は俺達で別れて搜索することになった。

どうやらさっきの制御室はB1から3までしか操作出来ないらしい。

B4行きのエレベーターで降りて行った。

エレベーターが開き、どうして人影を見なかったかが分かった。

ゲームで言うモンスターハウスだ。そこら辺に死骸がある。
ゾンビになって立ち上がるものもいた。

沙「どうやったらこうなるのよ」

ク「事故でも起こったんだろう。ガラスが割れてる」

正「俺達が囧になる。そのうちに行け」

化け物達がコッチに気付く。

正「MOVE！（動け！）」

親父達の部隊が突入していった。

孝「今の内に」

近づくものは蹴散らしながらひたすら走り、奥へと進み、窓ガラスが無いへ屋を開け、中に入り鍵を閉めた。

バ「これからどうする？」

沙「あのモンスター達がいたら先に進めないわ」

麗「でも何とかしないと」

部屋を見渡すと数枚の紙があった。

どうやらこの階はB・O・Wについて研究する階らしい。

冴「ここは薬品庫の様だな」

龍「解決策が見つかった。もしもの時の為にマニュアルが書いてあった。これによるとアイツラにとって有毒なガスが作れるらしい。

俺達にも有毒だそうからガスマスクを付けないとだな」

ジ「造った後はどうするの？」

龍「専用の部屋が有るらしいから、その部屋に行ってガスをセットする」

数分後、容器の中には茶色の液体が入っていた。

ジ「これを機械にセットすれば後は勝手に機械がやってくれるらしいわ」

ク「向こうの部隊にも連絡しておいた」

龍「行く人数は四人、俺、クリス、シェバ、バリーだ。後は休んでいてくれ」

薬品庫を出て目的地に向かった。

ハンターやリッカー、キメラという蠅を遺伝子に組み込んだB・O・Wも居る。

ク「無視して走り続けろ！」

クリスの言う通り、無視して部屋を目指す。

そこから順調に進み、ガスを散布した。

ク「ガスマスクを付けよう」

このガスは触れても問題無いが吸うと危険らしい。

部屋の外に出るとB・O・Wは死滅していた。

途中、銃声が響いた。

そこには発電室と書いてある扉があった。

バ「この部屋の中の様だな」

ク「シェバは皆を呼んできてくれ」

シ「わかったわ」

拳銃を構え、中に入った。

さっき別れた隊の内の一人だった。

龍「しっかりしろ！なにがあった」

「う、裏切り者・・・が居る・・・気をつけろ・・・」

部屋を搜索していると他にも銃で殺された者がいた。

龍「残っているのは親父と副隊長のヴィンセントだ、どちらかが裏切り者という事だ」

第十五話

龍「ヴィンセントは俺の教育係だった、あの事件の時も指揮を勤めてた」

バ「どっちが裏切ったんだ？」

ク「君はどっちを信じるんだ？ 龍次。教育係か父親か」

ヴィンセントは辛い時に相談に乗ってくれた。あの時も辛かったら部隊を離れても良いと言ってくれた。

龍「どっちを信じれば良いのか分からない・・・」

孝「どういう事ですか、これ・・・」

裏切り者がいることを話した。

冴「難しいな」

ジ「取り敢えず進みましょう」

廊下に出た。ガスが引いていたので全員ガスマスクを取り、奥に進んだ。

ちょうど曲がり角を曲がった瞬間に銃声が轟いた。

龍「二人かもしれない！急ごう！」

少し走るとヴィンセントがいた。血を流している。

龍「ヴィンセント！大丈夫か！？」

ヴ「龍次・・・君の父親が裏切ったんだ・・・今そこで撃たれた」

どうやら命に別状は無いが・・・

龍「・・・・・・・・」

ヴ「君の父親が世界中にウィルスをばらまいたんだ。部下を遣って・・・どうやら昔からマカロフと手を組んでいたらしい・・・」

麗「そんな・・・」

孝「じゃあ永やあさみさんが死んだのも龍次さんのお父さんが・・・」

龍「殺人鬼の息子って訳か、俺は」

ヴ「追いたい所なんだが、少し休まないと持たない。先に行ってくれ」

龍「わかった、皆行こう」

エレベーターの脇にある装置にカードをスラッシュしてエレベーターを起動し、中に入った。

ク「龍次、いざとなったら親でも撃て。分かってるな？」

龍「わかってる」

エレベーターが止まり、そして開いた。

龍「ここも研究室らしいな」

Gウイルスについて研究するところだそうだ。

龍「親父ッ！」

こっちに気づいたのか、走って逃げて行った。

龍「俺が追う！皆はマカロフとGウイルスを」

孝「わかりました」

通路を走りつづけたがゾンビもB・O・Wも見当たらなかった。

曲がり角を曲がると親父が止まっていた。いや、止められたのだ。

ヴィンセントが親父に銃を突き付けていた。

正「龍次、俺じゃない」

ウ、「見苦しいぞ隊長。死んで詫びてもらおう」

俺も親父に銃を向けた。

龍「待ってくれヴィンセント、こいつを皆の所に連れていく」

ヴ「ダメだ、今のうちに殺しておいた方が良い」

「親父には色々聞いておきたい事がある、皆のところに行こう」

「しかし・・・」

親父がヴィンセントに肘打ちを入れ、怯んでいる内に親父が銃を抜き、ヴィンセントに向けた。

ヴ「龍次、こいつを殺れ」

銃を向けた。

ヴィンセントに

ヴ「向ける相手を間違えてるぞ、龍次」

龍「俺は親父を信じる！」

孝「龍次さん！」

孝達もこっちに来たようだ。

ヴ「皆気をつけろ！こいつもグルだ！」

本性出しやがったな・・・

龍「俺と親父は裏切り者じゃない。信じてくれ！」

ヴ「騙されるな！こいつらはッ」

冴「私は二人を信じる」

冴子が一步前に出た。

冴「彼が信じてくれというのなら私は信じるよ。仲間だから」

龍「ありがとう冴子」

ヴィンセントが走って逃げて行った。

龍「あの野郎っ！」

正「追うな、龍次。奴は後で良い、今はマカロフが先だ」

ク「その事何だが、やばい事になった。奴はまだ持っていたTウィルスをこれから外に出すつもりだ」

龍「どこから？」

ク「この先に格納庫があるらしい。恐らくそこからだ」

この階の隅にあるリフトに入った。

リフトが止まり、扉が開いた。

この格納庫には階段があり、通路もある。

そこにマカロフが居た。お供が二人脇を固めている。

ク「動くなマカロフ！動いたら撃つ！」

俺達も銃を向けた。

格納庫の天井が開いていて空が見える。

本当にギリギリだった。

ク「今回の事件の黒幕として貴様を連行する」

マ「ぐぬぬ、貴様等・・・！」

孝「どうしてこんな事をしたッ！答えろ！お前達のせいで・・・永が・・・あさみさんが・・・」

マ「だからどうした！貴様の事なぞ知らん！人類は進化せねばならん、そのためには人類全てを篩に掛けねばならんだ！」

ク「どこでウィルスを手に入れた！？」

マ「数年前、ウェスカーとかいう男から貰った。劣化品だがむしろ好都合だった、動物には感染しないからな」

ク「どの道貴様の作戦は失敗だ！武器を捨てて投降しろ！」

マ「断る！」

マカロフの私兵が撃とうとしたが平野が私兵を一発ずつで仕留めた。殺した訳ではなく、急所を外してある。

マ「最終手段だ！」

マカロフが懷から注射器を取り出して打った。

マ「捕まるぐらいならお前らを殺す！たとえ自我が無くなってもな！」

マカロフが打ったのはGウィルスだった。

ク「奴を撃て！取り返しのつかないことになる！」

全員で一斉掃射するがどうやら無駄みたいだ。

マ「無駄だあ、ガッ、グガアアア！」

マカロフの背中に翼が生え、次に巨大な爪が生えた。数十秒もすれば最早人では無くなっていた。

こちらに飛んできて、着地した。すぐ前に沙那がいる。

龍「下がれ！沙那！」

沙「い、イヤ・・・」

ダメだ！足が震えてる！

マカロフが爪を振り下ろした。

平「沙那！危ない！」

平野が盾になって切られた。

孝「平野！！！」

バ「下がれこの化け物がア！！！」

孝がSPASを、バリーがマグナムで猛攻撃する。
俺達も援護射撃をしながら平野を引っ張った。

マカロフいやGもさすがに怯んでいるが死なない。

ク「リフトまで走れ！」

全員リフトに乗ったがGも追いかけてきた。

ク「ジル！」

ジ「わかってる！」

ジルがあらん限りのグレネードを撃ち込んだ。

リフトが閉まり、移動する。

ジ「急所は外れてるけど、早く治療しなきゃ」

沙「私のせいで平野が・・・」

平「高城さん・・・怪我は？」

沙「無いわ、アンタのおかげで・・・」

平「よかつ・・・た・・・」

バ「気絶しただけだ、俺が抱えよう」

シ「私も肩を貸すわ」

リフトが開いた。

ク「ジョッシュ！ヘリは来てるか！？」

ジョ「もういるぞ、どうした？」

ク「マカロフがGになった。平野も重傷だ」

ドゴォォン！

Gが壁を突き破って来た。

龍「ウオオオオオ！」

俺、親父、麗、孝、クリス、ジルで撃ちまくった。

龍「エレベーターまで走れ！」

手榴弾のピンを全て引き抜き、Gに向かって投げ、更にその手榴弾を撃った。

大爆発がGを包み、煙で見え無くなった。

エレベーターに駆け込み、扉を閉めた。

龍「どうやって倒す？」

ク「奴はロケットランチャーじゃ死なん。もっと大きな爆発じゃないければ……今は逃げるしかない」

龍「……皆は先に行ってくれ、俺が奴を倒す」

M4の最後のマガジンを込めた。

ク「どういう事だ？」

エレベーターが開いた。

龍「この階の発電室に爆破装置があった。それを操作する」

実はさっき隊員を看取った後、目に入ったのだ。

龍「皆屋上まで逃げ！俺が何とかする！」

発電室まで走った。

龍「これだ！」

起爆装置を起動する。

「爆破装置が作動しました。至急退避してください」

これでいい。

後は外に出れば・・・

発電室を出た所に奴がいた。

さっきよりも凶々しくなってる。

M4を撃った。

しかしすぐに無くなる。

胸のコルトパイソンを引き抜いて撃ちまくった。

G「ウガアアアア」

龍「しまった！！！！」

コルトパイソンがGの爪に引っ掛かって壊れてしまった。

G「ウガアオアア」

ここまでか・・・

サムライエッジを抜こうにも間に合わない！

ガギン！

冴子が刀で爪を防いでくれていた。

ク「肩に付いてる目を狙え！」

孝がショットガンの引き金を引いた。

G「グゴォォ」

俺もサムライエッジを抜いて撃ちまくる。

冴「ハアアッ！」

冴子が左腕を切り落とした。

ドサッ！

Gが倒れた。

ク「死んだ訳じゃない、早く外へ」

エレベーターに向かって走り出した。

瞬間、後ろで倒れていたGが起き上がった。左腕も再生している。

龍「しつこいな・・・誰かがここで食い止めないと、ヘリで逃げれない。三人共行ってくれ、俺が止める」

冴「私も残る」

龍「俺にやらせてくれ」

孝「一人じゃ無理だ！俺も残る！」

龍「孝、冴子・・・頼む、すぐに戻るから。クリス、二人を頼む」

ク「それで良いんだな？龍次」

龍「ああ。冴子、これを」

冴子にサムライエッジを渡した。

龍「弾はもうない、それに戦ってる最中に落とすっていうのも嫌だから、預かっというてくれ」

冴「わかった、必ず帰って来てくれ」

三人が走り去った。

俺のやること、こいつの手足を切り裂いてしばらく動けないようにすることだ。

山刀とマチェットを引き抜く。

龍「行くぜ化け物ッ!!!」

G「ウガァァァ」

（屋上）

ヘリが二機止まっている。

ジヨ「全員乗ったか？」

冴「まだ龍次が中で戦ってる。爆破する直前まで食い止めるつもり

で！もう少し待って」

（龍次Side）

龍「オリヤアア」

伸びて来る触手を切り飛ばす。

さっきGが床を叩き壊したせいでB4まで落ちてきた。

壁の向こう側には格納庫がある。

爪を避けて山刀を横に払う。

余り効いていないのか、直ぐに次の攻撃が来る。

バックステップで下がり、奴の弱点、右肩に付いてる目玉に突き進み、目玉にマチェットを突き刺した。

G「ヴガァアア」

Gが暴れ、壁を壊した。

そしてGに叩き飛ばされ、格納庫に落ちた。

龍「ぐ、もう時間が・・・」

何とかしないと、このまま行ってもこいつが逃げちまう。

何か無いのか？

あれは・・・

Gが降りてきた。

チャンスは一度、弾は一発

Gがコチラに歩いてきた。

ロケットランチャーを向けた。

奴ではなく、奴の真上に。

天井が崩れてGに大量の瓦礫が降り注いで潰した。
顔だけが見えている。

龍「あばよ」

山刀を脳天に突き刺した。

後数分でここは大爆発するだろう、多分ヘリには間に合わない。

耳に付けてる通信機をオンにした。

龍「皆、聞こえるか？」

冴「龍次、無事だったか！早く屋上に」

龍「慌てるなよ冴子。ジョツシュ、散布作戦は成功したのか？」

ジョ「ああ、成功した。早く来い！おいてっちまうぞ」

龍「沙那、平野の怪我大丈夫か？」

沙「ええ、命に別状は無いわ」

平「死ぬかと思いましたよ」

龍「孝と麗は？」

孝「大丈夫ですから早くへりに」

龍「・・・すまねえ、へりには行けそうにねえんだ、もう行ってくれ」

冴「何を言ってるんだ龍次！」

龍「クリス、ジル、シェバ、バリー、ジョツシュ、世話になりました。ありがとう・・・親父、ヴィンセントは頼んだ」

冴「もうエレベーターにいるんだろう？早く出てきてくれ」

龍「冴子、君には感謝してる。何度も助けられた。ありがとう・・・」

冴「龍・・・次・・・」

龍「さよならだ・・・冴子、好きだ・・・できればもつと一緒に居たかった」

ジョ「へりを出すぞ!!!」

龍「皆元気で」

へりが飛び去って少しした後、学園事研究所が崩壊。何も残すことはなかった。

死亡者…ヴィクトル・R・マカロフ

行方不明…間龍次
ヴィンセント

生存者…小室孝 宮本麗 高城沙那 平野コータ 毒島冴子 クリ
ス・レットフィールド バリー・バートン ジル・バレンタイン
シェバ・アローマ ジョッシュ・ストーン

エピソード

（BSAA基地内）

鞠「皆お帰り！」

希「龍次兄ちゃんは？」

麗「龍次さんは・・・」

孝「用事があるからって旅に出たんだ。いつか帰ってくるさ」

冴「・・・」

ジ「元気出して、彼に示しが見つからないわよ」

正「俺はヴィンセントを追う」

ク「俺達も協力する、アイツの死を無駄には出来ないからな」

月日は流れ、血の惨劇から二年がたった。

経済や政府はあっという間に快復し、学校も一年経てば再開された。

紫藤が脱獄し、一緒に居た生徒も行方不明になった。

孝、麗、沙那、平野は三年になり、冴子は卒業した。

彼女の鞆の中には形見の銃が入っている。

持ち主がいつか返しに貰いに来ると信じて・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6364v/>

学園黙示録highschoolofthedead + α

2011年10月9日12時59分発行